

# インクルーシブ教育を進めるための一人ひとりのニーズ に応じた学習支援に関する研究

— 高等学校における「個別の指導計画」の作成・活用を通して —

島村千恵子<sup>1</sup>

インクルーシブ教育が推進され、一人ひとりのニーズに応じた支援が求められている。特に学習は学校生活の基本的な営みであり、つまずきを感じる生徒個々への支援が必要である。本研究では、高等学校に合った個別の指導計画の様式を考案し、その作成・活用を通して学習支援の在り方を検討した。そして、生徒の学習を支援する力の向上と、生徒の達成感や自己理解を図ることを目指し、個別の指導計画の有効性を考察した。

## はじめに

平成 26 年度公立学校等生徒の異動の状況によると、神奈川県立公立高校等においては 3,074 人もの生徒が退学している。そのうち、学業不振を理由とする生徒は 312 人となっている。生徒の在学中に、様々な支援が行われることはもちろんのことである。しかし、これらの生徒の中には、学習が苦手だという気持ちのまま、達成感や自己肯定感を持っていないままに退学していく生徒が少なくないのではないかと私は、生徒がつまずき背景を知り、得意なことや苦手なこと、できる方法など、生徒が自己理解できるようになるための支援が必要だと思っている。生徒たちが自己理解をした上で、社会に出てほしいと考えている。一斉授業の中で、生徒一人ひとりが自己理解できるような支援は難しいかもしれない。しかし、一人ひとりのニーズに応じた教育が進められている今、生徒一人ひとりの力や背景を見立て、生徒のニーズに合わせた適切な支援ができる力が、教員に求められている。

## 研究の目的

現在、インクルーシブ教育システムの構築に向けた、特別支援教育が推進されている。平成 28 年 4 月から、障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律が施行されることになり、差別の禁止とともに、合理的配慮の提供が義務となる。そこで、合理的配慮の観点の一つである、個別の指導計画の作成・活用について研究し、障害のある生徒だけでなく、学習につまずきを感じている生徒の支援にもつなげたいと考えた。

高等学校学習指導要領は「障害のある生徒などに

- 1 神奈川県立綾瀬西高等学校教諭  
研究分野（一人ひとりのニーズに応じた教育研究 支援教育）

については、(中略)例えば指導についての計画又は家庭や医療、福祉、労働等の業務を行う関係機関と連携した支援のための計画を個別に作成することなどにより、個々の生徒の障害の状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと」としており、個別に計画を作成し、生徒の状態や指導内容、指導方法を工夫することが求められている。

「子ども一人一人の障害の状態や発達段階などを的確に把握し、それに基づいて、目標や指導・支援内容、評価の観点を明確にすることが求められており、その役割を果たすのが個別の指導計画」(海津 2012)である。個別の指導計画の内容は一般的に、生徒の実態の把握、実態を基にした目標の設定、目標を達成するための指導内容・手立て、指導の評価である。その作成・活用の過程の中で、教員が、生徒の学習を支援する力をつけられるのではないかと考えた。教員の支援を受け、生徒が達成感を得て、自己理解ができるようになることも目指したい。そこで研究の目的を「生徒の学習を支援する力の向上」と「生徒の達成感や自己理解の向上」とし、個別の指導計画の有効性を考察することにした。有効性の観点は第 1 表のとおりである。

## 第 1 表 個別の指導計画の有効性の観点

- 1 生徒の状況を見立てる力が向上したか。
- 2 適切な支援ができる知識・技能が向上したか。
- 3 チーム支援のための情報共有が図れたか。
- 4 生徒の達成感や自己理解が向上したか。

## 研究の内容

### 1 研究の方法

#### (1) 研究調査対象校

A 高等学校は、全日制普通科、3 学期制であり、900 名余りの生徒が学んでいる。1 年生は、国語・数学・英語の 3 教科で少人数制の授業を行っており、特に数

学は、学び直しのクラスを設けている。

平成 26 年度から 3 年間、文部科学省の委託事業として「高等学校における個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育」の研究開発に取り組んでいる。具体的には高等学校普通科における通級による指導の場を自校内に設置し、学習指導要領に定められた単位数を超えて、教科・科目ではない特別な指導の領域として自立活動領域を設けている。自立活動領域は、「リベラルベーシック（基礎学力の向上）」、「コミュニケーション（社会的自立や社会性の獲得）」、「ソーシャルスタディ（生活能力の向上）」、「社会参加・社会福祉体験（職業選択や職業生活を営むために必要な能力を高める）」という 4 つの領域を設けている。通級による指導の場では、3 名の生徒が学んでいる。

## (2) 様式の考案

学習指導要領で個別の指導計画を作成することになっている自立活動領域を始め、通常の学級の授業における個別の指導計画について、様式を考案することとした。

## (3) 作成チームの設定

個別の指導計画の作成・活用に当たって、作成チームを設定した。まず学級担任と教育相談コーディネーター（筆者）が中心となり、教科担任、領域を担当する教員（以下、「領域担任」という。）と連絡し合って作成することとした。そして、管理職やスクールメンター、スクールカウンセラー、特別支援学校の指導や助言を受けることとした。

## (4) 調査の方法

平成 26 年度特別支援教育体制整備状況調査によると、高等学校における個別の指導計画の実施率は 27.2 パーセントと低く、作成・活用した経験のある教員は少ない。A 高等学校でも、初めて個別の指導計画に携わる教員が多い。そこで、教育相談コーディネーター（筆者）が、様式の項目に従って学習の様子や目標、授業内容や手立て、評価を、学級担任や領域担任、教科担任から聞き取る形で作成することとし、授業や職員会議で活用することとした。その際に、感想や意見を聞き、考察することにした。生徒の変容については、個別の指導計画からうかがうこととした。

## 2 研究の経過

### (1) 個別の指導計画様式の考案

自立活動領域における個別の指導計画（以下、「自立活動版」という。）、通常の学級での授業における個別の指導計画（以下、「科目版」という。）、実態把握票、生活面等を加えた個別の指導計画（以下、「総合版」という。）の 3 種類の様式を考案した。

#### ア 自立活動版

特別支援学校学習指導要領解説自立活動編を参考に、1 学期は自立活動版の様式を考案し、作成・活用した。

学期ごとの作成とし、生徒の全体像として「本人の特徴」、それぞれの領域について「学習の状況（実態）」、「目標」、「授業内容・手立て」、「学習の様子・評価・次への課題」の欄を設けた。

#### イ 科目版

7 月に科目版の様式を考案し、2 年生の物理基礎で作成・活用した。単元ごとに授業内容が変わることを考慮し、単元ごとの作成・活用とした。「直前の学期の評価」、「観点別評価」とともに「学習の状況（実態）」、「目標」、「観点（関連する観点別評価）」、「手立て」、「評価」の欄を設けた。「学習の状況（実態）」では、テスト、提出物、実験・作業、授業態度等の項目を設けて実態を細かく把握できるようにした。その実態を基に目標や手立てを書くこととした。

#### ウ 総合版

さらに、総合版の様式を考案し、作成・活用した。これは、京都府スーパーサポートセンター作成の「高等学校における個別の指導計画」と A 高等学校が実施している「生徒プロフィールチェック」を参考に考案した。1 ページ目は「最近の学期末成績」、「支援が必要な項目」、「学習面、運動面、対人関係・社会性、生活面のチェック欄」と「特記事項、支援の経過」を記述する欄を設けた（第 1 図）。2 ページ目は、教員から見た「気になる行動・場面」、「本人や保護者の希望」、「希望する進路」、中学校からの引継ぎなどの「連携」、「1 年間の取組の様子」とした。3 ページ目は「各教科・科目」と「生活面・行動面」の個別の指導計画を記入することとした。「各教科・科目」では、教科横断的な情報共有ができるように複数教科を記入できるようにした。さらに支援の優先順位の高いものから記入することとした（第 2 図）。

個別の指導計画<実態把握票>		神奈川県立 高等学校	
作成日:平成 年 月 日(作成者: )		担任:1年( )2年( )3年( )	
年 組	ふりがな 生徒氏名	生年月日	平成 年 月 日
			ふりがな 保護者氏名
本人の状況			
最近の学期末成績(成績、欠時欄は左から1学期、2学期、学年末)			
教科・科目			
成 績			
欠 時			
《支援が必要な項目》※□にチェック			
<input type="checkbox"/> 進級 <input type="checkbox"/> 学習 <input type="checkbox"/> 集団参加 <input type="checkbox"/> 遅刻 <input type="checkbox"/> 登校 <input type="checkbox"/> 対人関係・社会性 <input type="checkbox"/> コミュニケーション <input type="checkbox"/> 進路 <input type="checkbox"/> その他( )			
《学習面》		特記事項・その他	
全体指導での指示理解	<input type="checkbox"/> できる <input type="checkbox"/> 苦手	支援の経過(月日)	
板書の書き写し	<input type="checkbox"/> できる <input type="checkbox"/> 苦手		
書字	<input type="checkbox"/> 乱雑		
課題等の提出	<input type="checkbox"/> できる <input type="checkbox"/> 少ない		
集中力の持続	<input type="checkbox"/> できる <input type="checkbox"/> 苦手		
ケアレスミス	<input type="checkbox"/> 少ない <input type="checkbox"/> 多い		
未修得単位	<input type="checkbox"/> ない <input type="checkbox"/> ある( )		

第 1 図 総合版 実態把握票(部分)

個別の指導計画 ( 学期 )		年 組 氏名		
神奈川県立 高等学校				
各教科・科目				
教科・科目 (優先的に支援 するもの)	学習の状況 (実態)	目 標	授業内容・手立て	評 価
生活面・行動面				
	様 子 (実態)	目 標	手立て	評 価
対人関係・ 社会性				
コミュニ ケーション				
その他				

## 第2図 総合版 科目・教科、生活面・行動面

### (2) 個別の指導計画の作成・活用

#### ア 自立活動版

#### (7) 作成・活用の流れ

自立活動版作成・活用の流れは第2表の通りである。

第2表 自立活動版作成・活用の流れ

日付・時期	内容
5月～6月	授業見学
5月27日	通級指導の場の利用生徒について学級担任から聞き取り (実態把握)
6月4日・18日	領域担任から聞き取り (生徒の実態・目標・手立て・授業内容)
7月1日・3日・8日	領域担任から聞き取り(評価)
7月14日・16日	聞き取り内容の確認
7月17日	職員会議にて共有
7月下旬	社会参加・社会福祉体験実施
9月17日	社会参加・社会福祉体験評価の聞き取り

聞き取り対象教員は、自立活動の領域を担当している教員9名である。

#### (イ) 教員の変容・気付き

初めて個別の指導計画に関わることになった領域担任から「様式に沿って記入していくことで、これまで漠然と理解していた実態や、授業の流れが整理された」という意見があった。様式に沿って実態や目標、授業内容・手立て、評価を文章化したことで、授業の流れが整理され、明確になったものと思われる。

#### (ロ) 情報共有

数学の教員から聞き取った、計算に関する情報を物理の教員に伝えたところ、その教員が授業で生かせる内容とのことであった。教科が違うと情報交換がしに

くいことがあるが、教育相談コーディネーターが間に入ることによって、情報の共有が図れることの一例となった。

また、職員会議で、職員全体に向けて完成した自立活動版の個別の指導計画を発表した。これは、学習の状況(実態)、手立て、授業の様子や評価を共有することで、一貫したチーム支援につなげることを目的とした。その会議後に職員から「文章化された情報を読むことによって、記憶や記録が残り、情報共有がしやすい」との感想があった。

#### (エ) 生徒理解

各領域担任から評価を聞き取ってまとめる段階で、ある生徒について、記憶はできているが情報の取り出し方につまづきがあるのではないかと気付くことができた。このことは、7月に行われた特別支援学校の教員による助言の「記憶を取り出すときに、手掛かりがあれば思い出せる」という言葉とつながり、新たな支援方法が見いだせた。

#### (オ) 生徒の変容

第3表は、自立活動版の一部分である。

第3表 自立活動版の個別の指導計画 (部分)

領域	リベラルベーシック (数学)
学習の状況 (実態)	かけ算や、繰り上がり、繰り下がりにもミスが見られる。
目標	計算のミスを減らし、問題の8～9割程度正解できるようになる。
授業内容・手立て	小数のかけ算に取り組む。確実にできる方法を見つけて、定着できるように繰り返し練習する。
学習の様子・評価・次への課題	始めは混乱していたが、本人に合った計算方法を提示したことで、ほぼ間違えずに計算できるようになった。

第3表から、教員が、生徒本人に合った解き方を提示したことにより、できることを着実に増やしていることが分かる。担当教員から「この生徒は計算のミスが減り、計算にかかる時間が以前より短くなったことで、とても良い表情をしている」との話があり、生徒が達成感を得て自己肯定感を高めていることが分かった。また、「ある生徒は、苦手な科目について意欲が向上している」との話があった。

そのほかコミュニケーションやソーシャルスタディ、社会参加・社会福祉体験の評価から、自己理解が進んでいることが分かった。学級担任によると、学校内だけでなく外部からの指導を受け、意見を聞くことで、できること、苦手なことの理解がさらに進んだとのことである。

## イ 科目版

### (ア) 作成・活用の流れ

学級担任や、教科担任からの聞き取りを進める中で、物理基礎の科目で、学習につまずき、支援が必要であると思われる生徒がいることが分かった。そこで、この生徒を対象に、科目版を作成・活用した。聞き取り対象教員は、物理基礎の教科担任1名である。科目版作成・活用の流れは第4表の通りである。

第4表 科目版作成・活用の流れ

日付・時期	内容
6月4日	教科担任から聞き取り（対象生徒設定）
8月31日	教科担任から聞き取り（対象生徒の実態・目標・手立て・授業内容）
9月～11月	授業
11月2日・11日	教科担任から聞き取り（途中経過）
12月18日	教科担任から聞き取り（評価）
12月21日	職員会議にて共有

#### (イ) 教員の変容・気付き

実態の一つひとつに目標を設定し、どの評価基準の観点に当たるかを設定したので、一つの観点到偏らないものになった。また、一つひとつの目標に対して手立てを設定したので、きめ細かい支援ができることが分かった。

しかし、その一方で、作成に時間がかかること、学期ごとに書くよりも書く回数が多いこと、支援する点が多くなるとクリアしなければならないことも増え、一斉授業の中では教員にも生徒にも負担であることが分かり、課題となった。

#### (ロ) 情報共有

職員会議で情報を共有することができた。しかし、一科目だけ記載する様式なので、教科横断的な情報共有がしにくいという課題があることが分かった。

#### (ハ) 生徒理解

実態把握をする際には、生徒が学習に取り組む姿勢、出席の状況、提出物の提出状況、テストの素点、観点別評価表を参考に様式への記入を行った。その結果、様々な情報を一枚のシートに収めることによって情報がまとめられ、生徒に対する理解が深まった。

しかし、「学習面のつまずきの背景として生活面の実態を知りたいが、この様式では生徒のつまずきの背景がわからない」という意見があった。このことも課題として、様式を改善する必要があると感じた。

#### (ニ) 生徒の変容

第5表、第6表は科目版の一部である。第5表は提出物に関する部分であり、第6表は実験・作業に関する部分である。

第5表 科目版の個別の指導計画（提出物）

科目（単元）	物理基礎（力の合成）
学習の状況（実態）	欠席が多く、授業への意欲があまり感じられない。学習支援員が声を掛けると、ワークシートに必要事項を書き入れることがある。
目標	ワークシートを7割程度出せるようになる。 ワークシートに感想が書けるようになる。
観点	1（関心・意欲・態度）
手立て	学習支援員や、教員が直接言葉かけをして書くことや提出することを促す。
学習の様子・評価・課題	学習支援員が授業に入れなくなった。ワークシートは、教科担任や学級担任の促しにより、遅れて提出できた。感想は、まだ自分の言葉で表現できないことがあるが、授業中の発言が増えている。

第6表 科目版の個別の指導計画（実験・作業）

科目（単元）	物理基礎（力の合成）
学習の状況（実態）	1学期には実験を欠席した。補習は出席し、レポートを提出できた。
目標	実験に参加し、レポートを作成して提出する。
観点	1（関心・意欲・態度） 3（観察・実験の技能）
手立て	実験の際は複数の教員で授業に当たる。一人は全体指示、もう一人は個別に生徒を支援する。
学習の様子・評価・課題	実験に参加するようにとの全体指示で、授業に参加することができた。グループ学習では、協力する姿が見られた。レポートについては、自分から教員に質問することができ、時間内に提出できた。

第5表、第6表から、生徒の意欲が向上していることがわかる。実験では、1学期は欠席で補習を受けていたが、2学期は授業に参加できた。また、グループ学習やティームティーチングによって、時間内にレポートを提出できた。教科担任の話によると、学級担任が具体的に、授業中の発言を増やすことやワークシートの提出を促したことが意欲の向上に大きくつながっ

たとのことである。教科担任も、促しや言葉掛けを続けていた。しかし、テストの正解数を増やすという目標は達成できなかった。そこで教科担任は、次の目標として、問題が解けるようになる、という目標を立て、補習という手立てを考えることができた。

#### ウ 総合版

##### (ア) 作成・活用の流れ

科目版の課題を改善するため、総合版を考案した。様式を考案したのが11月であったが、学級担任や教科担任の協力を得て作成・活用を行った。対象生徒は、通級による指導の場を利用している生徒2名と科目版の対象生徒1名、聞き取り対象教員は、学級担任2名と、教科担任2名である。作成・活用の流れは第7表の通りである。

第7表 総合版作成・活用の流れ

日付・時期	内容
11月11日・18日	教科担任から聞き取り（教科・科目）
11月26日・12月1日	学級担任から聞き取り（実態把握票、生活面・行動面）
12月18日	評価・聞き取り内容の確認
12月21日	職員会議にて共有

科目版の課題改善については、学級担任と教育相談コーディネーター（筆者）の2名で話し合いながら記入していくことにより、気付きが増えて記入がしやすく、書く時間が短縮できた。同時に、今後の方針を相談することもできた。実態把握票によって、生徒の背景理解にもつなげることができた。また、優先するものから記載したので支援が焦点化できたこと、複数教科を記載できるようにしたことから、科目版の課題を改善することができたと考える。

##### (イ) 教員の変容・気付き

新たに聞き取りをした教科担任から「対象生徒を以前より意識するようになった」という意見があった。まず、生徒一人ひとりを意識するようになることが、より詳しく実態把握をすることや、支援することにつながる。

##### (ロ) 情報共有

学級担任からの聞き取りの中で「保護者や本人の希望を書く欄があり、三者面談の際、活用できる」という意見があり、新たな作成・活用の場を考えることができた。三者面談や、生徒との二者面談の際に、本人や保護者の希望を記入することで、保護者や生徒本人との情報共有ができる。

##### (エ) 生徒理解

実態把握票を記入していく過程で、学級担任から「実態把握票によって、生徒の実態への気付きがあった」という意見があった。今まで見過ごしていたことが、チェック表によって、生徒の課題として意識されたの

である。このことは、生徒に対する新たな支援につながる。

##### (オ) 生徒の変容

生徒のうちの1名は、ワークシートで繰り返し練習することによって、物理基礎のテストで正解を増やし、目標を達成することができた。また、別の生徒には、教室で行われる授業では授業に集中しやすいように、座席を前にすることを手立てとした。どの科目も、より集中できるようになった。さらに、別の生徒には物理基礎、数学Aの指導計画を作成した。どちらも学級担任や教科担任が望ましい授業態度や提出物などを具体的に示したことで、生徒の意欲が向上し、目標を達成できた。

## 研究のまとめ

個別の指導計画の有効性の観点（第1表）に従い、個別の指導計画の作成・活用の有効性を考察する。

### 1 生徒の状況を見立てる力が向上したか

「対象生徒を以前より意識するようになった」という意見から、個別の指導計画の様式に記入することによって、対象生徒一人ひとりの状況を、以前より意識するようになったという教員の変容がうかがえる。また、「様式に沿って記入していくことで、これまで漠然と理解していた実態や、授業の流れが整理された」という意見からは、漠然と感じるだけであった生徒の実態が文章化されたことで整理され、明確になったことが分かる。「実態把握票によって、生徒の実態への気付きがあった」という意見や、評価の記述から生徒のつまずきに気付くことができたことから、生徒の状況を見立てる力の向上がうかがえる。

これらのことから、個別の指導計画の作成・活用は、生徒の状況を見立てる力の向上に有効であったと考える。さらに、話し合いによって相談ができ、新たな気付きにつながったことから、教員がチームとなり、見立てを共有、検討し、生徒に関わっていくことが、見立てる力を向上させるために必要であると考えられる。

### 2 適切な支援ができる知識・技能が向上したか

「様式に沿って記入していくことで、これまで漠然と理解していた実態や、授業の流れが整理された」という意見から、個別の指導計画は、生徒の状況（実態）だけでなく、手立てや授業内容も文章化することで整理され、教員自身の知識や技能の確認につながっている。また、評価の記述から、生徒のつまずきに気付くことができ、特別支援学校の教員からの助言によって、新たな支援方法を知ることができた。これらのことから、個別の指導計画を記録として活用し、積み重ねを図っていくとともに、教員の研修や特別支援学校など

の関係機関と連携を深め、知識・技能を向上させていくことで、さらに有効性が高まると考える。

### 3 チーム支援のための情報共有が図れたか

個別の指導計画の様式を活用することにより、「記憶と記録が残り、情報共有がしやすい」という意見から、個別の指導計画の作成・活用は有効だと分かる。

手立てを共有することで、有効だった手立てを他の授業に生かすことができ、チームとして一貫した支援をすることができる。また、記録として情報共有することは、引継ぎがしやすいだけでなく、他の生徒の支援への参考にもなるというメリットがある。また、教育相談コーディネーターが間に入ることによって情報の共有が図れたことは、個別の指導計画が、教科横断的な情報共有に有効であることを示している。「三者面談の際に活用できる」という意見からは、保護者や生徒本人との情報共有に活用できることが分かる。作成・活用場としては、職員会議のほかにケース会議、学年会が考えられる。複数の教員で作成すると、視点が増え、個別の指導計画をスムーズに作成できる。同時に、教員がチームとして、一貫して生徒の支援をする上で有効な手段であると考えられる。

### 4 生徒の達成感や自己理解が向上したか

研究の経過で述べたように、生徒は達成感を得て自己肯定感を高め、自己理解を進めている。学習意欲も向上させている。個別の指導計画を作成し、評価を行うことで、このような生徒の変容が読み取りやすくなっている。

通級による指導の場のような少人数の授業では、生徒は大きく変容している。しかし、通常の学級における授業では、生徒の変容は通級による指導の場に比べて小さい。このことから、通常の学級における一斉授業の中での個別支援の方法を検討し、さらに教員の知識・技能の向上を図ることが必要であると考えられる。

### 5 今後の課題と展望

本研究ではA高等学校の協力のもと、3種類の個別の指導計画の様式を考案し、作成・活用した。平成27年度から、文部科学省では高等学校における通級による指導が検討されている。自立活動版は、通級による指導において活用できる。科目版については課題も多かったが、生徒の情報を一つにまとめることができ、実態を細かく把握し、支援しようとするときに活用できる。総合版は、チェックシートを導入したことにより、取り組みやすい個別の指導計画になったと考える。まだ改訂の必要はあるが、情報の内容、取り組みやすさ、情報共有の点で、総合版の様式が最も活用できるのではないかと考えている。今後は、検証を行えるように事例を増やして行くことが重要である。

また、「一定の地域内では、できるだけ統一した様式で使うことが、小中の連携や、地域の連携に役に立ちます。」（東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会、小貫 2010）とあるように、地域の小学校、中学校、高等学校において活用できるよう、様式の検討ができれば、さらに個別の指導計画の意義が高まると思う。

### おわりに

神奈川県では、平成28年1月に県立高校改革実施計画が示され、平成28年4月から、インクルーシブ教育実践推進校において、障害のある生徒に高校教育を受ける機会を拡大する取組が始まる。時を同じくして合理的配慮の提供が義務となる。ますます一人ひとりのニーズに応じた支援が求められる。

これからの高等学校において、学習支援を始め、様々な支援をしていくために、個別の指導計画は有効な手段である。これからも、様式とともに、より良い内容を持った個別の指導計画を作っていく。計画を授業や生活面の支援に生かせるように知識や技能を身につけていきたい。学校全体がチームとなり、有効な手立てを共有し、積み重ねていけるようにしていきたい。そして生徒一人ひとりが適切な支援を受け、やがて社会的責任を果たしながら充実した人生を送ることができるよう、支援していくための努力を続けていきたい。

### 引用文献

- 海津亜希子 2012 『個別の指導計画作成ハンドブック 第2版』 日本文化科学社 p.14  
東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会 with 小貫 悟 2010 「通常学級での特別支援教育のスタンダード」 p.57

### 参考文献

- 神奈川県 「平成26年度公立学校等生徒の異動の状況」  
<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f6559/p952755.html> (2016年1月取得)  
神奈川県立綾瀬西高等学校 「生徒プロフィールチェック」 平成27年度版  
京都府スーパーサポートセンター 「高等学校における個別の指導計画」  
[http://www.kyoto-be.ne.jp/uji-s/ssc\\_topics20130408\\_2.html](http://www.kyoto-be.ne.jp/uji-s/ssc_topics20130408_2.html) (2016年1月取得)  
文部科学省 平成21年 『特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編』  
文部科学省 「平成26年度特別支援教育体制整備状況調査 調査結果」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/1356211.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1356211.htm) (2016年1月取得)